

2024年12月20日

通貨ニュース

ブラジル: BCB は過去最大規模のドル売り介入を実施

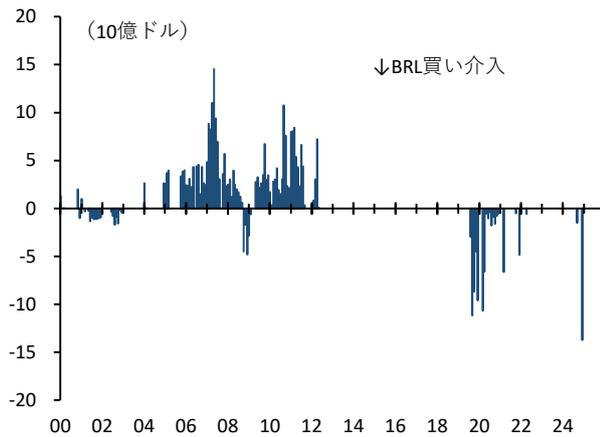
過去の本欄で繰り返しているように、ブラジル中央銀行(BCB)は13日以降、ほぼ毎日ドル売りの為替介入を実施している。19日の介入は最も規模が大きかったようで、スポット市場で80億ドルのドルを売った模様だ。ブルームバーグによれば、1日の介入規模としては、1999年以降(変動相場制移行後)では最大とのことだ。筆者が手元で計算した限りにおいても、スポット市場における12月のドル売り介入額は、19日時点で140億ドル近くに達している。これも、月次統計で遡る限り、やはり過去最大である(図表1)。なお、BCBは既に20日にも30億ドル規模のドル売りをスポット市場にオファーすることを表明しており、12月の介入規模は更に拡大する可能性が濃厚だ。

なお、ブラジルの外貨準備高は18日時点で3522億ドルだが、これは直近ピーク時の3722億ドル(10月1日)と比較すると▲200億ドルも減少している。もっとも、この水準は数年単位で見れば低い水準ということもなく、「砲弾の不足」を懸念するのは時期尚早だ。国際通貨基金(IMF)が公表するARA(適正外貨準備額)統計を確認すると、ブラジルの2023年末の外貨準備高は3550億ドル、ARAは1.27である(図表2)。外貨準備は足許とそこまで変わらないが、ARAの計算に用いられる負債額は増加していることから、今現在のARAは1.27を下回っている可能性が非常に高い。そうはいつても、ARAの望ましい水準は1.0~1.5と言われており、1.0を割り込んでいる可能性は大きいとは言えまい。ただし、債務の積み上がりと外貨準備の取り崩しが続けば、ARAが1.0を割り込む可能性は十分にある。このままドル売り介入を継続するのは、明らかに得策とは思えない。

いずれにしても、これだけの歴史的な介入を実施しているのにも関わらず、BRLに反転の兆しは見えない。従前から述べているように、本年のBRLの変動の主な説明変数は同国の財政問題である。ルラ政権が財政健全化に対し重い腰を上げて立ち向かわない限りにおいては、短期的にBRLの買い戻しを想定するのは困難と言わざるを得ないのが実情だ。財政悪化懸念が極まった現環境においては、BCBによる金融政策や通貨政策は残念ながら無力な存在に過ぎない。

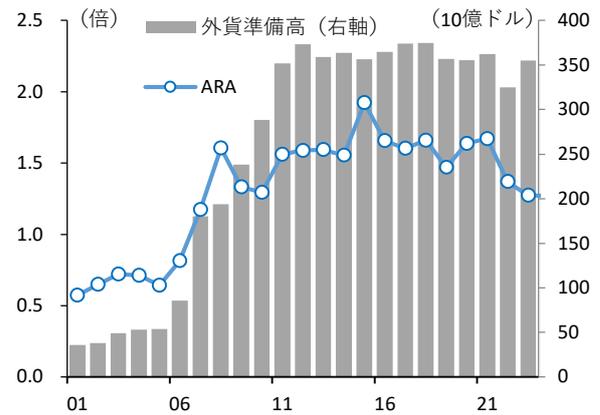
金融市場部
マーケット・エコノミスト
長谷川 久悟
03-3242-7065
kyugo.hasegawa@mizuho-bk.co.jp

図表 1: BCB のスポット市場における為替介入実績(月次)



出所: BCB、Macrobond、みずほ銀行 ※12月は19日まで

図表 2: ブラジルの外貨準備高とARAの水準



出所: IMF、Macrobond、みずほ銀行

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。